

地域おこし協力隊活動報告書

2021年3月末で任期を終える炭谷隊員の3年間を活動報告書としてまとめました。活動内容の紹介とあわせて、ひとりの若者がわからないことだらけの移住先でどんなことを悩み、考え、喜び、そして定住を決意したかを記しました。また、炭谷隊員の活動を紹介するうえで欠かすことのできないレティファームの内藤早百合さんからいただいたメッセージも掲載しました。



●2018年5月
〈古民家yamani開き〉
住まいの大日向4区の古民家をyamaniと命名。集落の人や協力隊、信州大の学生を招き「この場所がどんな地域になったらいいか」等意見交換。同じ集落の半数の人が来てくれたことがうれしかった。



●7月
〈レティファームのフレッシュハーブを楽しむ会〉
レティファームのファンの方を中心に、実際にハーブを栽培している現場を案内する企画を実施。畑の様子の見学とフレッシュハーブを使ったブレンドを4種類試飲。参加者は8人限定。



●7月
〈プルーンジャムづくり〉
まちづくり団体ジーバ共和国の活動の一環として企画。須田農園で特産のプルーンを収穫してジャムを作り、ランチで味わう会。佐久穂町から2人、上田市から1人、北杜市から7人参加。

●8月
〈空き家バンク見学会〉

翌年度開校予定の小学校に入学するために、町全体で住宅需要が高まることが想定され、空き家の発掘が協力隊としてのミッションになった。活動のなかで、古い空き家を改修して住むイメージが持てないことや、田舎特有の住宅事情（下水処理や寒さ対策等）に苦労した経験があったことから、空き家の現状を移住希望者に伝えることが必要と考え、見学会を実施した。



●11月
〈野沢菜づくり講座〉
大日向に住む人の暮らしを教わる会として、野沢菜づくり講座を企画。野沢菜を畑で収穫して50キロほどをみんなで漬け込んだ。参加者は12人。

●11月
〈大日向交流会実行委員会参加〉

大日向収穫祭としてこれまで有志らが実施してきたイベントを、翌年度開校予定の大日向小学校の関係者も交え、大日向交流会として開催した。この企画段階で、初めて大日向の区長たちと一緒に活動することになった。そば打ちや豚汁、大日向に住む人のステージ発表などの文化祭的催し。チラシの作成や、当日の飲食関係の調整に当たった。



●12月
〈いいなかバトンプロジェクト〉
信州大学武者ゼミの学生による『いいなかバトンプロジェクト』をコーディネート。信大生が大日向に入るためのきっかけづくりとして、区民との親睦会を開くにあたり、区長や区民と大学生をつなぐ役割を担った。

1年目の振り返り

最初から「協力隊とはこうあるべき」という理想像があり、それはつまり、キラキラした都会的な移住者にならなければいけないという気持ちから生まれたものだった。情報収集のためにフェイスブックを始め、面白そう、つながりができそうと思ったことに全て参加していた。参加した先では、この地域にはどんな活動があってどんなプレイヤーがいるのかというまちづくり界隈の情報をとにかく集めた。理想の協力隊になるためには何をすればよいかかわからなかったから、情報収集やコネクションづくりをしていた感覚だった。同時に、協力隊として自分は周囲からどう評価されているのかが非常に

気になった。自分で課した「いいプレイヤーになる」というハードルがつかかった時、恩師の武者先生に「この地域を嫌いになって出ていくことが一番残念な結果だから、それさえ回避して楽しくやればいいんじゃない？」と言われて相当楽になった。2年目からは、「自分の評価は自分ですればいい」と割り切ることができるようになり、イベント参加やコネクションづくりをしなくなった。そうした行動は、不安の表れだったといえる。今振り返れば、自分のできることもわからないのに、地域でなにかしたいなんて傲りだと気が付く。

●2019年4月

〈大日向小学校開校〉

大日向小学校の開校。図らずも大日向に住んだ私としては、新しく大日向に縁のできた人と、地元の人との間で顔の見える関係がつくられること、大日向をふるさとだと思えるような場所になることを期待して2年目の活動をスタートさせた。



●4月
〈味噌づくり講座〉

ジーバ共和国の活動で、とれた大豆を使ってみそを仕込む会を企画。移住してきた大日向小学校の関係者やジーバ共和国のメンバーを含め20人程度で実施。



●5月
〈ヨモギ団子づくり〉

大日向小学校に入学するために移住してきた家族と、大日向の住人との間で顔の見える関係ができあがることをテーマにした学生の活動がスタート。大学生が主催したヨモギ団子作りのイベントのサポートにあたった。



●6月
〈大日向運動会〉

大日向小学校が開校して初めての運動会。大日向交流会の企画を共にした区長らとともに、地域の運動会として実施することになり、地元からの参加も募った。



●7月
〈プルーンジャムづくり〉

「信州サーモンとプルーンを味わう」というテーマで、プルーン畑と生簀の見学を行った。生産者の須田清さんと佐々木信幸さんの人柄や思いを直接共有できる場にしたいと考えた。



●9月
〈NAGANO COFFEE FESTIVAL in 御代田〉

2018年に白馬村で始まったイベント。御代田町での開催が決まり、東信初開催に向けて実行委員として活動。当日は5000人ほどの集客があり、自家焙煎をしているコーヒー屋16店舗、フード11店舗が参加。



●10月
〈台風19号により大日向全域が被災〉

自宅も被災。大日向のために何もできない無力感があった。社協に設置されたささえ合いセンターのメンバーとして訪問したり、無償のマッサージやハーブティを提供する機会をつくった。

●2020年2月
〈地域の道しるべ新聞発行〉

台風19号災害で面識がある区長たちの疲労ぶりを目の当たりにしたことや、発災当時の記憶が薄らぎ、忘れられてしまうことに危機感を感じ、11月に副島隊員とともに区長へのヒアリングを実施。その結果を用いて、災害当時の様子や教訓をまとめた「地域の道しるべ新聞」を発行し、全戸配布した。

2年目の振り返り

自分の考えや方向性が明確になった2年目。1年目で色々な人に会ったりイベントをやったりしてみて、自分が進みたい方向性が明確になってきた。イベントに参加したり運営に加わる中で、都会的な移住者ばかりが集まる場に違和感を感じていた。都会的なイベントももちろん必要だけど、それは私のやりたい方向ではなかった。移住者、地元の人、高齢者、若者など、価値観の異なるさまざまな人が一緒に何かをする楽しさを大日向での暮らしで知ったからだと思う。最初はぎこちなかった関係が、次第に溶けて心が通う瞬間をもっと見たいと思うようになった。レティファームとはどんどん関係性が密になっていって、レティで

食べていけるかいけないかは別として、レティがあるから佐久穂町にいたいと思うようになった。最初は数ある活動のうちのひとつという感じで、内藤さんと一緒にやっていくとは思っていなかった。自分で事業を起こさなければならないという思いも少しあったけれど、2年目の後半くらいから、内藤さんとともにレティファームをやっていくことが、私のやりたいことと言えるようになった。「必要とされなくなったらそれで終わりなのか？」という風に考えていた時期もあったが「私がレティをやりたいからやるんだ」と思い、この町に残る覚悟ができた。



●2020年4月
〈レティファームのオンライン販売をBASEにてスタート〉
●5月〈アルストロメリア販売〉
大日向の花き農家を訪ね、コロナ禍で出荷ができなくなったアルストロメリアがあることを知り、その現状を多くの人に伝えたいと考え、オンラインで100ケースほど販売した。参加した農家は2軒。



●2021年2月
〈バレンタイン商品を企画販売〉
夜だけスポーツバーとして営業しているお店から、「昼間の時間帯も活用してほしい」との相談を受けた。当初はカフェの予定で進めていたが、コロナ禍の影響で、レティファームのハーブを使用したバレンタイン商品を販売した。

レティファーム 内藤早百合さんから

八十二銀行の営業さんの紹介で、地域おこし協力隊になる前の炭谷茜さんと出会いました。その時の私はすごく忙しかったから、営業さんが心配してくれて、「こういう子がいて、頭もいいし、レティに合うと思います」と言われて紹介してもらいました。当時のレティファームは、どうしようもない状態でした。事業も徐々に広がってきている最中で、畑仕事があり、営業活動があり、事務作業があり、研修があった。一人だと色々なことに手が回らずに、いただいた注文に対応するのが精一杯でした。

最初はどんな人がやって来るかわからないでしょ。でも、彼女はハーブティを美味しいと言ってきて、すごく気に入ってくれました。それから、「ここで働きたい」と言ってくれました。次にレティへ来た時には、さっそく私が苦手なパソコンの作業をしてくれたんです。それからすぐに畑も手伝うようになってくれました。彼女が来てくれたおかげで、私にも気持ちの余裕が生まれて、他のことを考える時間ができました。

第一印象は、きれいな子。公民館に車を停めてもらって、迎えにいった、きれいな子だなんて思いました。私の母はすごくおしゃべりなだけけれど、彼女は一緒にお茶を飲んで話を聞いてくれて、母の料理も一緒に食べてくれました。だから母は彼女が大好きなんです。そのうちにお弁当を持ってくるようになって、3人でお昼も食べるようになりました。仕事もすごくできて、喋ってみてもきちんとしていて、お茶も味わっておいしいって言ってきて、最初からいい印象でした。

ハーブティのブレンドの見直しも、一緒に飲むととても心強いです。「これはちょっと多いかもしれませんね」とか、どうしようって一緒に考える人ができました。SNSの発信もしっかりとやってくれて、その結果レティが広がったのは間違いないです。若い感覚やトレンドも彼女から学びました。わからないことだらけの毎日の中で、彼女が来てくれました。レティも段々きちんとしてきました。

一言で言えば、信頼できる最高のパートナー。確定申告も一緒にやるし、商談も一緒に行くし、彼女と二人三脚でここまでやってきました。そのうえで、佐久穂町に残ってくれることは、本当にありがたいです。そのためにも、彼女にちゃんとお給料を払えるように頑張らないといけません。

大きな夢として、雇用を生めるような会社になりたいと思っています。近所のお母さんたちの空いている時間にお仕事をお願いしたり、使っていない畑をハーブ畑に変えて、みんなで楽しくやること、それが私の夢です。彼女がここに来てくれたおかげで、その夢も実現できそうです。彼女にここにいて欲しいから、まずはしっかりお給料を払えるように。それが私の今の目標です。

いつから信頼したのかな。最初の印象がよかったのと、きっかけ

があったというよりは自然に。裏表のない子だとわかったから。とてもまじめな子で、伝えたことをきちんと考えて、きちんと自分で受け止めて、やってくれる。まじめって大事なことです。でも、つまらないわけではないし、楽しむところはちゃんと楽しんでいる。違う目線の子だったら、こんなに一緒にできなかったかな。ここに来たばかりの彼女はボロボロの状態できてきて、私も昔は同じ感じだったから、そこはちょっと似ています。まさか田舎で畑をやるなんて考えてもいなかったです。

彼女はどんどん地域の中に入っていくんです。上から目線ではなく、同じ目線で地域を見ているから、受け入れられている。同じ目線で地元の人と一緒に暮らせる人はなかなかいないと思います。それは本物だからだと思います。嘘だったらみんな見抜けちゃう。彼女はうわべだけじゃなくて、心の底から本当にそう思って接しているから、入っていけるんだと思います。そこは私も信頼しているところ。それに、お人好しかといえそうでもなくて、言うことはずばずば言う。おじちゃんたちにも、「それはセクハラです」とか。それもおじちゃんたちにとってはいい勉強になっていると思います。

この前のチョコ、すごくおいしかったです。レティという名前を使っているけれど、あれは彼女に全てお任せして、一から企画して作ったんです。それが自信に繋がったんじゃないかなと思います。すごく生き生きとやっていて、私はそれがすごく嬉しかった。彼女が他の部分でも独立して食べていけるようなものができたら素敵だと思います。

3年間という時間はあっという間に過ぎました。「今年もハーブが足りないね」って話を2人でしています。大きな取引先もできたから、今年は本当に頑張らないと。彼女がこれから独立するにあたって、いいスタートを切ることができました。最近になってこういう明るい話が徐々に入ってくるようになったのは、彼女と一緒に頑張れたからだと思います。10年かかったけど、レティを始めてよかった。そこに彼女がいてくれることが嬉しいです。



3年間の総括

まず、協力隊という名刺がなかったら、こんなにもたくさんの方の知り合いはできなかった。協力隊という看板が、強烈に私を外へ外へと押し出してくれた。町のための協力隊だから、自分から挨拶することが当たり前になった。シャイなこの町の人にとって、自分から知らない人に挨拶をするということは難しいことだと知った。本来の私は、自分のことを人に話すのがとても苦手だ。でも、自分から向かっていかなければならなかったから鍛えられた。どういう理由でこの町に来て何をしているのか、自分のことについて繰り返し話をした。そうして出会った人たちが、町で声をかけてくれたり、何かやりたいときには何の見返りも求めずに協力してくれた。地縁のない土地で生きるための覚悟は、そうやって出来上がった。

地方に関心を持った高校生のときは、実際の田舎を想像できなかった。メディアでは漠然と地方衰退が取り上げられていて、そうした場で使われる言葉は「過疎地域」とか「シャッター街」とか「農家の人手不足」とか。それらは決してそこで暮らす人の顔が見えるようなものではなかった。私の地方のイメージは、机上で語られる言葉によって作られたイメージのまま、さびれて、力なく弱々しいものだった。

まちづくりを考える大学生になり、市街地まで車で40分かかかるような山奥に行くことがあった。薪ストーブにあたりながらとち餅を作る話を聞かせてくれたおばあさん。認知症で離れて暮らす妻のことを話してくれたおじいさん。そこでみたのは、ひとり寂しく背中を曲げ、頭をもたげている姿ではなかった。心から、たくましいなと思った。それでも学生だったときは、上から目線で「地方を活性化させる」という言葉を使っていた。それだけ、私にとって田舎の生活はまだ他人事で、誰かがどうにかするものだと思っていた。

この町に来てから、私は「活性化」という言葉を使っていない。世帯数40弱の小さな集落で暮らし、この集落がどうなったらいいか、どんな景観を残していきたいか、そのためにはどう行動したらいいのか。拡大鏡で見るというよりも、学生の時とは異なる視座から、田舎を語るできるようになった。

自分でも驚くほど、大日向への愛着ができた。他にもいい場所はたくさんあるだろうし、どこも似たようなもんじゃないかと思われるかもしれない。でも、ほかの地区の物件を見て、いざ大日向を離れることを考えたときに、喪失感があることに気が付いた。いま、寂しさを感じずに過ごせるのは、車越しに手を振りあう人ができたり、漬物の作り方を教えてくれるおばあちゃんがいたり、元気にしてるかなあと顔を出すご夫婦がいるから。「協力隊だから人と関わらなくては」と思い込んで人と関わっていた部分もあったけれど、そうして築いてきた関係が、意外にも一番大切になっていた。ほかの地域に引っ越したとして、協力隊という

プレッシャーがない中で、大日向と同じように安心できる居心地の良い関係をつくれる自信はない。

最初から続けたのは、プルーンジャムや野沢菜の仕込みという食の魅力とその道のプロに教わる場づくり。初めは「協力隊だし、地域の魅力を発信しなければ」という気持ちもあった。でも次第に、人を集めてイベントをすること自体には、私の目的意識は向いていないことに気が付いた。

「佐久穂町にはこんないいものがあるよ」と多くの人に大きな声で知らせたいのではなく、単に作り手の人柄を知っていくうちに、みんなに紹介したくなっただけ。「野沢菜は霜が当たったけどいつ仕込もう」と悩む姿や、「プルーンを一番美味しい状態で届けられるかな」と心配する姿。その逡巡や葛藤をそばで見ていると、自然とファンになる。そうして生まれた愛着は、「あっちのほうが安くて美味しいから」とすぐに離れるものではなく、揺るがない応援の気持ちになった。そういった出会いがこの町のあちこちで生まれてほしいと思った。

その最たる例が、レティファームとの関わり。最初の頃はほんのアルバイト程度の気持ちで始めたレティファームのお手伝い。「お手伝い」という言葉に違和感を持ちはじめたのが2年目の夏頃。夏は忙しい。午前中に畑でハーブを摘んで洗って乾燥させて、午後は出荷作業をする。その合間にお客様が見学に来て、新規の案件にも同席する機会をもらった。HPの開設準備やSNSの発信も担当し、レティファームの一員として働いた。その中で、単に人手として収穫しているだけではなく、単に映える写真を撮っているだけではなく、もっとこのブランドを確かなものにしたと考えるようになった。もはや「お手伝い」ではなくなった。しかし、自分の事業ではないのにもかかわらず、踏み込みすぎてしまったゆえの葛藤や、煮え切らなさのようなものも常に自分の中にあった。ある時、「もうレティに関われなくなるのではないか」と思う出来事があった。その時、はっきりと「もうこの町で暮らしていく意味がなくなった」と思った。もちろんそれは私の思い込みで、レティファームは変わらずに、今も私の居場所として存在してくれている。そこでの気づきは、必要とされているから手伝っているのではなく、私が選んでこの場所で働きたいと働いているのだと自覚する契機となった。これからも、これまで以上にレティファームの一番のファンとして、応援していくことに変わりはない。

炭谷 茜

1990年生まれ。千葉県松戸市出身。地方のまちづくりに興味を持ち、信州大学に進学し、武者ゼミナールに在籍。在学中は長野県内を中心に、果樹農家の人手不足解消や、過疎地域の高齢者の暮らしなどのフィールドワークを行い、田舎で暮らす人のたくましさを知った。大学卒業後は長いモラトリアム期を過ごしていたが、恩師からの紹介で2018年から佐久穂町で生活することになった。